第52回東海公衆衛生学会学術大会の報告

学術大会の概要と特別講演

報告者：大会長　藤岡正信（財）愛知県健康づくり振興事業団）

1. 学術大会の概要

第５２回東海公衆衛生学会学術大会は、平成１８年７月２２日（土）にあいち健康の森健康科学総合センター（愛称：あいち健康プラザ）で開催された。今回のメインテーマは話題性と開催地を考え「健康長寿をめざして」が取り上げられた。開催当日は前日までの雨模様がうそのような快晴に恵まれ、参加者３２４名を得て盛況に開催された。午後のシンポジウムは一般県民にも開放し、更に多く方に入場いただいた。

大会は、午前中は開会式に引続いて３会場で一般演題３５題（口演２０、示説１５）と特別講演が行われ、午後は総会とシンポジウムが開かれた。なお、学術大会終了後には、同じ会場で愛知県主催の地域健康長寿シンポジウムが開催された。

今回大会の試みとして、メインテーマである健康長寿に関連した内容の提供と、多職種の方が参加しやすい環境作りを心掛けた。健康長寿関連では県のシンポジウムとの同日開催や管理栄養士の献立による健康弁当の提供などを、環境作りでは実行委員とシンポジストに合計６職種を配置した。また、名誉会員への参加を呼びかけたが、残念ながら少人数の参加に留まった。

参加者３２４名の内訳は、会員１２０、非会員５９、学生１４５であった。地域別では愛知県１９０、名古屋市５２、岐阜県４２、静岡県２９、三重県８、職種別では学生を除き保健師５８、医師５７、栄養士１６、教員７、歯科衛生士と事務職６の順であった。このように多職種かつ多数の参加に加え、各会場では活発な討議が行われた。皆さんの応援のお陰で、当初の目的が達成でき感謝申し上げます。

2. 特別講演「健康長寿をめざして」

特別講演はメインテーマと同じ「健康長寿をめざして」と題して、国立長寿医療センター研究所　下方浩史疫学研究部長よりいただいた。講演の内容をまとめると、日本は社会的支援、遺伝素因、ライフスタイルに恵まれ、世界一の長寿を誇っている。一方、死については惜しまれながらの死を望み、痴呆や寝たきりの死を忌避している。この解決には老化や老年病の予防が必要であるが、残念ながらその分野の研究者は限られている。

健康長寿の研究の一端を、肥満を題材にして、体型と生活習慣病との関係、ダイエットによるリバウンドの危険などを中心に話された。高齢者ではむしろ痩せが問題であって、身長が縮むため成人肥満度の単一な適用は慎重にすべきであると強調された。また、遺伝子の探索から、骨粗鬆症との関連に触れ、閉経女性では組合せによる大きなリスク差があることが判明している。この点は、オーダーメイドの指導や予防措置が必要であり、不安材料にするのではなく、予防のための的確な情報提供が重要であるとして、長寿科学振興

財団の健康長寿ネットの紹介があった。

最後に、長寿医療センターで実施中の長期縦断疫学調査の概要について説明された。この研究も足掛け１０年を迎え、健康長寿に必要な膨大なデータが蓄積されつつある。これらのデータの分析により、健康長寿のための各種の情報が順次提供できそうだと締めくくられた。健康長寿に関する研究は進展途上であり、今後の研究成果の発表に大きな期待を寄せて特別講演は終了した。

シンポジウム「健康長寿のための実践活動」のまとめ

報告者：座長　犬塚君雄（愛知県中央児童・障害者相談センター）
水谷美佐子（愛知県半田保健所）

今回のシンポジウムは、今大会のメインテーマ「健康長寿をめざして」を受け、「健康長寿のための実践活動」と題して、各地で実践されている先駆的な活動を５人のシンポジストに報告していただき、会場の皆さんで共有し、明日からの更なる活動につなげていこうという主旨で企画しました。

三重県から「健康長寿と栄養」、名古屋市から「健康長寿と歯科：“健康名古屋プラン 21 の目標達成にむけて”」、愛知県から「健康長寿と運動」、静岡県から「健康長寿と住環境　－ソフト面とハード面を支援する職種の連携を－」、岐阜県から「健康長寿と温泉」というテーマでご報告をいただきました。　うち 2 題は健康日本 21 の地域版での独自の取組みの進捗状況や中間評価、さらには課題に向けての具体的方策の報告でした。あとの 3 題は実践活動や研究の結果の報告や紹介でした。愛知県からは虚弱高齢者用運動プログラムの廃用症候群予防に対する効果の報告がありました。また、岐阜県の行ってきた温泉と健康に関する最近の研究が紹介され国内外の温泉、入浴に関するＥＢＭの観点から評価検討し、今後の衛生行政の方向性を示唆されました。日本においては温泉が健康に良いとするＥＢＭのグレードの高い論文は認められなかったことや、あらゆる分野での疫学の重要性が軽んじられていたのではないか等の指摘がありました。

「衣･食・住・運動・入浴（温泉）」という身近なテーマだったため、５人のシンポジストへの質問、意見が出され活発なディスカッションが行われました。最後に名古屋大学公衆衛生学の豊嶋英明教授から「５つのテーマはそれぞれ重要な部分であるが、健康長寿をめざして、これらを総合的に捉え、地域でのグループの役割など、社会的アプローチ（心理面等を含む）へと進んでもらいたい」と要望が出され、今後の課題とさせていただき、有意義なシンポジウムとなりました。

一般演題セクション1（感染症・ストレス）のまとめ

報告者：座長　増井恒夫（愛知県健康福祉部健康担当局健康対策課）

Ａ－１　直接ＢＣＧ接種後の早期の皮膚変化について

直接ＢＣＧ接種後の早期に局所所見を認めた１０例のうち、９例は第１日に、１例は第２日に局所の変化に気づいており、いずれもツベルクリン反応検査は陰性で、同居家族等に結核り患者はいなかった。軽微な発赤も含めた局所反応は、非特異的な皮膚の過敏性反応である可能性もあるものの、感染を完全に否定するには経過観察以外に方法はない。こうした局所反応の臨床的意義づけや対処の標準化が必要である。

Ａ－２　透析患者の不明熱に対する抗結核薬の診断的治療に関する研究について

透析患者は細胞性免疫能低下のため、結核発症のリスクが高いが、肺外結核が多く診断が難しいため、一般抗菌薬が無効の場合、抗結核薬が使用されることがある。抗結核薬の使用実態と予後を検討するため、維持透析患者における不明熱の発生頻度、抗結核薬使用の割合、解熱割合の比較を調査指標として調査を行う。

Ａ－３　CYP2C19 遺伝子型を用いたピロリ菌除去自由診療

ランソプラゾール、クラリスロマイシン、アモキシシリンの３剤投与によるピロリ菌除去医療では、２～３割の除菌失敗例が見られる。PCR-CTPP 法により CYP2C19 遺伝子型を決定し、高活性型、中等度活性型、低活性型に分類した結果、高活性型の CYP2C19 遺伝子型を持つ者では除菌率が低いことが確認された。

Ａ－４　ストレスと生活習慣

女子短期大学生 305 名を対象に、ストレスの程度や、食生活を中心とした生活習慣などについて自記式のアンケート調査を行った。その結果、ストレスを強く感じている者は約 30%、中等度は 40%、弱い者は 30%であった。ストレスを強く感じている群は、ストレス下での食欲の変化が大きい傾向があり、不健康な生活習慣が多く認められた。

Ａ－５　音楽療法における反応性の研究

大学生女子約 130 名を対象に、音楽を聴取しながら、感情アンケートと気分調査票に回答を求め、音楽聴取時の気分と曲に対する感情反応の関連を検討した。その結果、音楽聴取時の気分と、曲に対する感情反応との間には一定の関連がみられた。

一般演題セクション2（母子保健・歯科保健）のまとめ

報告者：座長　永田知里（岐阜大学大学院医学系研究科　疫学・予防医学分野）

母子保健・歯科保健として演題５つを担当しました。「岐阜県岐阜保健所における思春期保健対策の取組み」、「乳幼児健診方式子ども事故サーベイランス・データの利活用」、「弱視児童生徒用拡大教科書無償給与について」、「Ｎ町における都市的地区と農村的地区のむし歯有病者率の比較と生活習慣・生活環境要因の検討」「愛知県におけるう蝕対策の一手段としてのフッ化物先口」です。どれも公衆衛生の実践活動から生じる問題点を指摘しており、行政のあり方を考えさせられる演題でした。教科書的に方法論を整えれば格段な成果が期待されるというものでもなく、何らかの制限の中で現状を見据えながらの公衆衛生活動もいくつか紹介されたと思います。以下、各演題について紹介します。

「岐阜県岐阜保健所における思春期保健対策の取組み」では、県の教育委員会の全面的支援が得られない中で、何とかいくつかの高校、大学に協力いただき、性教育を中心としたピアカウンセリングが行われています。「乳幼児健診方式子ども事故サーベイランス・データの利活用」では子どもの事故について精度の高い登録システムがない中、情報の質は低いものの乳幼児健診を利用して実態の把握に努めようとしています。「弱視児童生徒用拡大教科書無償給与について」では、弱視児童生徒のための大教科書無償給与の制度の盲点をついて暴利をたくらむ悪質な業者の存在がうかがわれ、国の政治のあり方、国民の（自分も含め）無関心さをも考えさせられます。「Ｎ町における都市的地区と農村的地区のむし歯有病者率の比較と生活習慣・生活環境要因の検討」では地区による差が指摘され、これもむし歯に限らずいろいろな問題点を孕んでいるかも知れません。「愛知県におけるう蝕対策の一手段としてのフッ化物先口」では県が中心となり、本格的なう蝕対策が実施されていることが紹介されました。具体的な目標の設置、教育委員会、歯科医師会、薬剤師会、大学歯学部等の関係機関との連携づくりも入念で、中間評価ではフッ化物先口実施率は目標を上回りました。施策として位置づけられることによって、このような格段の成果が得られることがはっきりと示された例でした。

一般演題セクション3（筋力・体型と健康）のまとめ

報告者：座長　尾島俊之（浜松医科大学健康社会医学）

Ｂ－１　地域筋力強化教室終了後７か月後の効果に関する研究

前期高齢者を対象とした下肢筋力強化を主目的とした教室開催後に、自主化活動が続けられている。その教室に関して、教室前、教室終了時、終了７か月後の３時点での比較を行い、外出頻度、体力測定結果（10m歩行の速度、10m歩行の歩行率（時間当たり歩数）、全身反応時間、長座体前屈、椅子立ち上がり運動）について、有意な向上がみられたことが報告された。教室後の自主化活動が続けられたこと、また教室終了７か月後の評価を行っている意義は大きい。

Ｂ－２　高齢者に対する開眼片脚起立時間と他の体力指標・運動習慣との関連

あいち健康プラザで簡易健康度評価を受けた高齢者を対象として、開眼片脚起立時間と種々の変数についての分析結果が報告された。性、年齢にもよるが、歩行速度、握力との関連性を明らかにし、併存妥当性が検証された。また、日常生活上の規定因子として、定期的な運動習慣を有する者、さっさと歩く者において、開眼片脚起立時間が長いことを示すなど、有意義な報告が行われた。

Ｂ－３　体組成計を用いた脳卒中患者の筋肉量分析

脳卒中患者の非麻痺側、麻痺側別の筋肉量について、マルチ周波数体組成計を用いて客観的に測定したデータに関する分析結果が報告された。脳卒中発症後の期間が長いほど筋肉量が減少していること、リハビリ回数よりも外出回数の方が筋肉量との相関関係がみられることを明らかにし、リハビリを行う上で、活動性の増加を前提とした訓練の重要性を示すなど、興味深い報告が行われた。

Ｂ－４　成人女性における痩せと身体的健康状態との関連

健康診断を受診した20～39歳の女性について、痩せに着目して、ＢＭＩおよび半年間の体重変化との関連性の分析結果が報告された。痩せているほど、また体重が減少しているほど、血液中のリンパ球の数が少ないことを明らかにし、不適切なダイエットの影響を示した重要な報告であった。

Ｂ－５　健康寿命延長の鍵となる地域・小規模事業所職域保健連携における県型保健所の役割

従業員50名以下の小規模事業所の経営者および従業員に健康管理、健康意識についての郵送法調査を行い、主成分分析等を行った結果が報告された。事業所規模が小さいほど健診実施率が低く、産業医の選任が少なく、持病を持つ従業員が多い結果であった。また、富士市は全国と比べて、将来の健康不安が多く、健診後の指導・精検・治療が低かった。住民の健康寿命延伸のためには、小規模事業所は重点的に健康増進支援を行うべき対象であることを明らかにした意義深い報告であった。

一般演題セクション4（災害保健・ホームレス問題）のまとめ

報告者：座長　藤村美登里（名古屋市西保健所）

Ｂ―６は、近い将来予測されている東海地震、東南海地震の地震防災対策強化地域を管轄する保健所が、地域防災計画関係者（防災担当）と市町村保健師と連携を図り、それぞれの職務・業務の専門性特性を生かした地域防災体制づくりの研究発表であり、Ｂ―７は、Ｂ―６の活動に参画した地域防災計画関係者（防災担当）から、この活動の研究発表である。

Ｂ―６　地域で取り組む災害時保健活動体制（その１）～16･17 年度 2 年間の取り組みをとおして（保健所保健師の立場から）

東海地震、東南海地震の地震防災対策強化地域を管轄する保健所保健師は、大規模地震発生に備え、地域防災計画関係者（防災担当）と市町村保健師と連携を図り、保健師ひとりひとりが災害発生時に主体的に活動ができるよう意識向上を図る取り組みを平成１６年度から開始した。取り組み内容として、平成 16 年度の年間プログラムは、第１回「度阪神淡路大震災への支援活動の実際をビデオ鑑賞」、第２回「図上訓練、グループワーク」、第３回シンポジウムとした。第３回のシンポジウム企画中の 10 月新潟県中越地震が発生し愛知県下保健師も健康支援活動に参画した。そして、参画した保健師の実際の体験報告が第 3 回の中でなされ、改めて、この取り組みの重要性及び具体的な災害時の保健師の役割を考える契機となった。平成 17 年度の年間プログラムは、第１～３回はテーマ別ワーキング、第４回は、ワーキングのまとめ及び講演会とした。

この２年間の取り組みの成果として、「災害時の保健師の役割を具体的に考える契機となった」、「防災担当者に専門職の保健師の活動の理解が得られた」、「保健活動マニュアル作成の気運があがった」の３つである。

保健所は、広域的に地域支援を果たす役割として、所内体制の強化とともに市町災害時保健活動体制づくりを支援し、防災を含め、今後もお互いの活動を確認する場を提供していくと結んでいる。

Ｂ－７地域で取り組む災害時保健活動体制（その２）～16･17 年度 2 年間の取り組みをとおして（防災担当の立場から）

災害時の要援護者支援対策は大きな課題であり、その対策には行政・医療機関・民生委員、ボランテア団体等連携が不可欠である。防災担当者が、「地域で取り組む災害時保健活動体制づくり」に参画を契機に、住民の防災意識の啓発の機会を保健師、栄養士等専門職が行う保健活動の中に取り入れた。

まとめとして、防災行政においても保健師等のもつ専門性の活用は有意義なものであり、医師会との連携や災害要援護者対策においても、防災機関との調整役に適し、円滑な医療救護策活動に不可欠な職務であると結んでいる。

Ｂ－８ホームレス保健サービス支援事業を実施して

（第１報）－関係機関との連携から見えたもの－

Ｂ－９　（第２報）－健康調査・健康診断結果から見えてきたもの－

Ｂ－１０（第３報）－歯・口腔の健康状態からから見えたもの－

Ｂ－８･９･１０は、愛知県ホームレス自立支援施策等実施計画に基づき愛知県一宮保健所が、平成17年度保健サービス支援事業を管内に生活するホームレスを対象に実施し、その事業のマネジメント、健康実態調査、健康診断(結核・成人基本診査・歯科)等についてそれぞれの担当者からの研究発表である。

事業を推進するにあたり、支援機関である医師会、ハローワーク、国土交通省、市関係課、民生委員等19機関との地域ネットワークを設置し、研修会、事例検討会、会議を開催し、情報交換、問題、課題等共通認識を持ち取り組み体制を整備した。

管内ホームレス把握数は32名であり、健康実態調査、健康診断、健康相談、訪問指導等実施した。健康実態調査（Ｎ＝30名）では、ホームレス歴は、１ヶ月から10年と幅広く、リストラ（失業）がホームレス契機となった者６名、アルミ缶回収の収入者５名、また、健康診断（Ｎ＝13名　平均年齢56.7歳）では生活習慣病等要医療３名、要精検３名であったが費用の問題で２名のみ受療であった。歯科検診では、一人当たり現在歯数17.15本、健全歯数は6.85本であり、咬合している箇所が認められない者が9名であった。

課題、まとめとして、ホームレスの自立には、関係機関の支援連携が不可欠であるが、ホームレス自身が持つ問題解決能力を高め、それぞれの関係機関がもつ役割をコーデイネートする担当が必要あり、サービス体制を持ち得る市がその担当に望まれる。また、自立後のフォローアップ支援も視野に入れ関係機関の連携を積み上げていきたいと結んでいる。

一般演題セクション5（細菌・血液活性）のまとめ

報告者：座長　武隈清（あいち健康の森健康科学総合センター）

C 会場では、「細菌・血液活性」のセクションで計３題の担当いたしました。半田保健所からは、冷蔵条件における粉わさびの腸炎ビブリオに対する抗菌作用についての発表でした。常温条件での報告は多数なされているが、冷蔵条件での検討は少ないという背景のもと、様々な条件下での粉わさびの抗菌作用を検討され、また、食品中の脂質含有量により粉わさびの抗菌作用が影響を受けることを説得力のある研究デザインでご提示していただきました。

残り 2 題は、名古屋市立大学からウルトラマラソンランナーを対象とした研究報告のレース前後における血液検査所見の変化等について発表していただきました。2 題中の最初の報告は、心理的状態と関連する可能性が考えられるβエンドルフィン、セロトニンについて、ウルトラマラソンレース前後での経時的変化についてのものでした。もう一方の報告は、免疫能の指標であるナチュラルキラー細胞活性について、ウルトラマラソンランナーでは一般人のデータと比較して高いこと、またレース直後にはそれが一時的に低下するというものでした。身体活動が高血圧、糖尿病をはじめとする生活習慣病の予防に有用なことは公衆衛生関係者に広く認識されています。また、心理面、免疫機能にも身体活動が好影響を及ぼすことも明らかにされていますが、その評価指標は十分ではありません。これら２題の報告では、身体活動が健康に与える影響について、公衆衛生関係者にとっては従来と異なった視点で見ることができたと思われます。また、洗練されたデータ解析の手法もさることながら、レース前に競技者から採血検査の同意を得るという困難な研究を実施された大学関係者の熱意に感銘を受けました。

今回のセクションで発表された３題のいずれの演題も、研究の方法論について公衆衛生関係者に様々な示唆を与えてくれたものと思われました。

一般演題セクション6（保健統計）のまとめ

報告者：座長　田中眞也（愛知県一宮保健所）

Ｃ－４　愛知県内某自治体職員におけるメタボリックシンドロームの有病率

メタボリックシンドロームと他の危険因子の保有個数やＢＭＩと年齢との関連を検討している。調査は、35 歳以上の者を対象とし、アンケートの配布は 9,842 名に対して行われた。うち、同意書からアンケートへの協力者 6,437 名（65.4%）、健診成績提供者 5,904 名及び腹囲データについての有効回答が 6,409 名（男性 5269 名、女性 1140 名）であった。

日本肥満学会基準による腹部肥満者は、男性 50.4%、女性 6.8%等の検査結果は基準値や調査方法について慎重な検討を行う必要があるとの指摘があった。また、調査対象者から一層の協力を得るための方策を考えることも必要であると思われる。

Ｃ－５　四日市喘息患者の平均余命及び死因に関する研究

四日市市公害認定患者は 1,300 名を超え、2005 年 8 月現在で 518 名が生存している。調査は認定患者（生存者及び死者）1,231 名について、1975 年～2000 年の 5 年毎の生命表を作成し平均余命と死亡率を明らかにすることにより、認定患者と県全体の年齢調整死亡率を比較している。

公害認定患者の平均余命は県全体と比べて短く公害の影響が示唆されたが、呼吸器疾患以外による死亡率が高い傾向が認められ、今後の原因究明が期待される。

Ｃ－６　静岡県及び全国における脳・心・血管疾患の死亡率の比較分析

最近 6 年間の静岡県及び全国都道府県別に心疾患･脳血管疾患・高血圧性疾患の粗・年齢調整死亡率、受療率等の比較分析を行っている。

平成 16 年の心疾患・脳血管疾患は年齢調整死亡率で、男女ともに全国上 1～5 位は東日本の県が占め、全国下 1～5 位は西日本の県が占める傾向にあった。

なお、脳･心血管疾患に関与する高血圧性疾患の入院と外来を合わせた受療率は全国･静岡県ともに大きく減少しており、高血圧の自己管理の進展が背景にあるのではないかとの見解が述べられた。

Ｃ－７　生活習慣と死亡率の関係

Ｂody Mass Ｉndex（以下、ＢＭＩ）に総コレステロール値と、喫煙の有無という要因が加わることによる年齢調整死亡率の関係を前向きに観察している。

調査は多治見市における平成 12 年度基本健康診査の受診者 30～74 歳のうち男性 1,924 名、女性 6,591 名を対象として行い、喫煙と総コレステロール値を考慮するとＢＭＩが正常であるときの死亡率がいつも低いとは限らない等の結果が示された。

本集団のＳＭＲ（標準化死亡比）は全国と比べて偏りがある集団とのことであり、引き

続き調査対象の偏りが本解析結果に与えている影響を検討されることが期待される。

一般演題セクション7（生活習慣と健康）のまとめ

報告者：座長　西口裕（三重県健康福祉部）

Ｄ－１「出産経験のある女性の体型および生活習慣と骨密度に関する研究」では、出産経験者の骨密度と体型、妊娠期および授乳期の食生活等との関係についての調査結果が報告されました。２０～４９歳の２０９名について骨密度と体重、BMI、体脂肪率、運動習慣、妊娠期の牛乳摂取量、出産回数等との相関等を検討し、骨密度への影響は体型、運動習慣に比べ、妊娠期の牛乳摂取、出産回数は小さいが、骨密度を高く保つには妊娠期の牛乳摂取量を増やす働きかけが必要との検討結果が報告されました。同年代の妊娠・出産経験のない群との比較検討が必要ではないかと思いました。

Ｄ－２「幼児期における朝の目覚めと生活習慣との関連に関する調査研究」では、幼児の睡眠習慣及び食生活を含めた他の生活習慣の実態調査、睡眠習慣の一つである朝の目覚めとその他の生活習慣との関連についての検討結果が報告されました。「朝の目覚めが良い者」は、「どちらとも言えない、ぐずぐずしている者」と比較し、睡眠時間より、就寝時間が早い時間帯の者に多く、また生活習慣として、食欲があり、毎日規則的な排便習慣があるものが多いとの結果が報告されました。今後、親の生活習慣との関係、親が幼児の基本的な生活習慣を形成する上で睡眠習慣をどのように考えているかなども含めさらに調査研究をされることが望まれます。

Ｄ－３「基本健康診査受診者の生活習慣と臨床検査項目との関連～中高齢者の飲酒習慣因子と血圧、肝機能および血中脂質の構造方程式モデリング～」では、飲酒習慣と臨床検査項目間の構造や関連について、基本健康診査のデータを用い構造方程式モデルで検討されました。飲酒習慣因子と最高血圧、肝機能および中性脂肪の間には、統計学的因果関係があり、中でも、一日平均の飲酒量がγＧＴＰを特に強く規定していることが指摘されました。会場からは、今回の研究の解析基準を満たしているのは、基本健康診査を受診した 179,691 人の中で 341 人であり、もう少し大きな解析数での検討が必要ではないか？との質問があり、基本健康診査のデータのバグが大きいとの課題があることが発表者から指摘されました。

Ｄ－４「楽しみながら健康づくりから～「健康あいち」知多半島の旅を実践して～」では、知多半島の豊かな自然資源や漁業、酪農、やきものなどの歴史ある産業観光と、地域の健康づくりを推進する総合的な拠点である愛知健康プラザを結びつける新たな健康メニューの開発とその効果が報告されました。超高齢社会、団塊の世代の退職の時期を迎え、多機関が連携して、楽しみながら健康づくりをする環境整備が望まれます。

一般演題セクション8（保健一般）のまとめ

報告者：座長　澁谷いづみ（愛知県半田保健所）

セクション８（保健一般）D-5 から D-8 の４題は、まとまったテーマのものではないが、それぞれが貴重な体験や調査結果であり、関連する法律や制度の黎明期において、今後その活用・発展が期待されるものであった。

「D-5　中学校２年生男子生徒の感想文から性教育を考える」では、産婦人科として臨床経験のある演者が、愛は育むもの、という相手を思いやることの大切さを伝えた思春期教室の経験を発表された。男女別に実施することのメリット・デメリットが活発に議論された。

「D-6　乳癌患者における楽観主義の度合いと癌への適応度について」では、楽観主義の度合いが高まるにつれ、精神的な健康度が良好で癌への適応度に貢献しているのではないかと発表された。対象の協力を得るのに困難な調査と考えられたが、告知の問題など臨床面への応用の可能性もあり、今後癌対策の推進にも寄与することが期待された。

「D-7　高齢者虐待防止の取り組みについて」では、息子による両親への虐待と思われる事例への対応を通じて、関係機関の虐待の認識の違いが浮き彫りになり、研修会を開催した経験を報告された。今後も高齢者虐待防止・養護者支援法の理解が広がり、適切な運用が図られるよう関係者に期待が寄せられた。

「D-8　保健師が行う生活機能評価を考える」では、生活要因と健康指標の関連性を分析し主観的健康観や幸福観が向上する働きかけや保健活動が重要だと発表された。具体的にその成果をどのように評価するかが今後の課題、と締めくくられた。

いずれも現代の世相を反映した興味深いテーマで、多くの参加者をひきつけていた。特に最初の演題は、演者の熱意のほとばしりを感じたのか、発表時間中の参加者が多い発表となり好感が持てた。

癌対策、高齢者虐待は深刻なテーマであったが、演者の今後に繋げていきたいという真摯な姿勢は評価したい。また、最後の発表は、健康は人との関係性が重要だとの示唆を改めて提起された。これは健康の原点を考えさせる、今学会最後の一般演題発表に相応しい一題であった。

最後に、各演者とその共同発表者の今後の活躍を期待したい。